「愛された人生」

終戦間近の苦しい時代、父は守三と光子の五人目の末っ子として
この世に生を受けました。両親の名前から一文字ずつ名付けられた
ことからも想像できる通り、とても可愛がられて育ったそうです。
そのおかげか素直で愛嬌のある、子供がそのまま大きくなったような
人でした。祖父守三の背中を追い薬学の道に進みましたが、自分には
あまり向いていなかったかもしれないと悩んだこともあったようです。
しかしその愛されるキャラクターで皆様からご助力を賜り、
東京医科歯科大学、帝京平成大学で研究をしながら教壇に立ち、
キャリアの最後は公益財団法人東京生化学研究会の専務理事を
務め上げました。また自分が生まれ育った高円寺の家を後の世代にも
残したいとマンションに建て替え、三十年かけて一人でその借金を
完済しました。
晩年は学生時代からの仲間たちと共に趣味のゴルフと麻雀を楽しんで
いました。しかし二〇一八年に最愛の妻・律子と死別し、その頃から
自身の病気も少しずつ悪化していきました。たった一人の孫・巧光と
毎日一緒に過ごせたことは苦しい闘病生活で最大の癒やしだったかも
しれません。おかげさまで、人生で何も思い残すことはないと満足
していましたが、唯一妻を自分より先に亡くしたことについては
病室でも最後の最後まで、こんなはずじゃなかった、もっと大事に
してやれば良かった、と悔いていたようです。今頃再会を果たし、
共に歩んだ人生を笑顔で労い合っていることと思います。
父 石館 光三 は、二〇二四年二月六日、八十歳にて召天いたしました。
人生の途上で出会い、父の歩みを支えてくださった皆様へ深く感謝
申し上げます。
本日はご多用の中ご参列いただき誠にありがとうございました。
略儀ながら書中をもってご挨拶申し上げます。

二〇二四年二月十日　告別式

喪主　石館 光太郎

外　親戚一同

尚 本日は何かと混雑に取り紛れ不行き届きの段あしからず
ご容赦下さいますようお願い申し上げます